Ⅶ　小水力の未来を思う

ヨーロッパでは水力開発に対する国民的な認識が高く、ドイツでは理論的な包蔵水力は、日本の１／６であるが、１０，０００kw以下の小水力発電所の数は６倍以上あり、水力の利用密度が非常に高い。

日本と同じように、大規模の開発はほぼ終わり、小水力に比重が移ってきた。その証拠に外国の発電機器が、何と三分の一で入る時世になった。

水のエネルギーを余すことなく発電に利用していこうとする意識が強く、出力１０，０００ｋｗ以下の発電所も脈々引き継がれて、社会の中で貴重な資源に位置づけられている。その数は、７，５００か所にも上っている。

一方、日本の場合はそこまで国民的認識が芽生えていなく、高度成長期に廃止されたものもが数多く残され、最近できた小水力も補修せずに河川に放置されている。

日本で何故進まないのかの最大の理由は、水力の価値の認識が低いこと、国の開発に対する戦略や推進体制にもあるが、地元で小水力を開発しようとしても、それを支援する心ある専門家が少ない。

地域によっては、環境観念が必要以上に厳しい所がある。生活を良くしたいのであれば、何事もトータルで物事を判断することも必要である。